

## 諸注意

本作は以前に参加した『じゃぶじゃぶマイドアリ』において頒布したトリカブト小説『死与の少女』シリーズ準拠のオリジナル設定に基づいた後日談ストーリーとなっております。原作設定と異なる描写がありますのでご注意ください。

## 登場人物紹介

### トリカブト

害虫に滅ぼされた村から唯一人生き残り、世界花「ウィンターローズ」に花騎士として選ばれた少女。あらゆる害虫を下す程の高い実力と天性的なセンスを有しているものの、未だその心にはあどけない幼さを残している。

自身を信頼してくれる団長に対しては、父親のような、もしくは兄のような親しさを覚えていたが、次第に一人の男性として意識するようになり、その気持ちが恋であることを自覚してからは惜しげもなく好きという気持ちを表すようになった。

### 団長

プロッサムヒル王国に所属する騎士団「セントフローレス」の団長を務める青年。田舎村で生まれ育ち、幼い頃から王城料理人を夢見ていたが、太古の勇者の血を引いていたために世界花からの啓示を受けて団長に任命された。トリカブトに対して当初は妹のように大切にしていたが好意を告白されてからは大切な彼女として見るようになった。トリカブトが身につけている白チェック模様のマフラーは以前の任務の最中に身につけていた自身のマフラーをプレゼントしたもの。(本作前日譚については『死与の少女 ～穢身に秘めし騎士道～』『死与の少女 ～光輝を纏いし想い～』を参照)

戦いは終わった。

——そんな言葉を自分の人生で口にできる刻ときが来るとは思わなかった。

すっかり夜も更けたプロッサムヒル王城の一角にある騎士団長執務室。その団長席でやつとこさ今日のデスクワークを終わらせた騎士服姿の青年が、一息つきながら軽く背を伸ばす。かつて戦時中、数え切れないほどの部下たちから『団長』と呼ばれて親しまれた彼は、戦後の復興作業に日々追われていた。

——今日で一年、か。

世界せかい花はなの加護に護られた自分たちの世界、スプリングガーデンの平和を脅かす、害虫たちと千年以上続いた戦争は終結した。

故郷こきょうを守るため、敵討かたまりちのため、愛する人を守るため。様々な理由で花騎士フローライナイトたちになった少女たちの戦いは幕を下ろしたのだ。

しかし、害虫との戦いの後は新たな試練がスプリングガーデンの民に立ちはだかった。

戦後の復興だ。度重なる戦いによって花騎士フローライナイトと害虫どちらもおびただしい血が流れ続けたこの世界の大地には、今も至るところに戦火の傷痕きずあとが残っている。

傷ついているのは世界だけではない。この世界に住む人々も、害虫からの被害によって心に傷を負っている。

そんな絶望の場面から立ち上がったばかりの世界と民に対し、希望の熾火<sup>おきび</sup>となったのが、戦争に立ち向かった自分たちスプリングガーデン中に存在する騎士団だ。

世界花から魔力の加護を授かった花騎士<sup>フラワーナイト</sup>たちは、戦後の至る場所で必要とされ続けた。

今まで害虫を討<sup>う</sup>つために使っていた魔力は、復興作業のあらゆる場面で役立ち、戦いのために騎士団間で築き上げられた団結力は、各地の被害状況の共有と現地の作業に必要な連携に活用された。

結果、千年以上続いた害虫による甚大な被害は、たった一年で瞬く間に傷が癒えた形となった。花騎士<sup>フラワーナイト</sup>たちの献身的な働きのおかげだ。いつ終わるともわからない、飽くなき戦いに身を費<sup>つ</sup>やしていた彼女たちは、やっと死と隣り合わせの運命から解放された。

そして一人の民として、自分の望む世界のために未来を歩むことが許されたのだ。復興はそのために必要な仕事である。きつと、誰もがやる気に満ち溢れて毎日頑張り続けたのだろう。戦いが終わった後で「故郷<sup>こきょう</sup>のために騎士団を抜きたい」と口にしてきた何人かの花騎士<sup>フラワーナイト</sup>たちも、今は遠い地で元気に頑張っていると聞く。みな、それぞれの幸せのための生活を送っているのだ。

そして団長もまた——、一人の男としての幸せをその手につかんでいた。

団長は執務室を抜けて急ぎ足で城の門を出たあと、最短ルートで王城の敷地内を東へ進む。

そこには、厳かにそびえ立つ白亜の屋敷が存在していた。今の団長の所有物であり、帰るべき家。戦後まもなくして、ブロッサムヒル女王の命令によって与えられたその最大の財産は、かつてブロッサムヒルが誇る近衛騎士団の大団長が使っていたとされている由緒正しき建造物だ。が、十数年前にその大団長が戦地で命を落とした後は、引き継ぐものが誰一人おらず、戦争によって人が少なくなり、余裕がなかった王族たちにとっても使い道が見いだせず、持て余していた代物と聞いた。

そんな中戦争を終わらせた功労者で、紛れもなく、スプリングガーデンの誇る英雄だった団長に対し、王族たちがためらいなく差し出せる褒章としてこの屋敷は都合が良すぎた。戦争終結後すぐ、この屋敷が与えられると話を聞いた当初は、さすがの団長も目を剥いたほどだ。

——故郷でのんびり生きていくと思つたのに、王都の一等地で屋敷持ちになるなんてな。視界いっぱい広がる、月明かりに照らされた我が家を眺めて苦笑したあと、団長は玄関にたどり着いて静かにドアを開ける。屋敷とともに与えられた、いつもあちこちを歩き回って敷地を管理している従者たちの姿はない。今は真夜中で、とつくに課業時間を過ぎていくからだ。夕方なら多少遅くとも律儀に出迎えてくれるのだが……むしろ誰もいないほうがリラックスして帰れる分、好都合だった。

玄関をくぐり、きつく締めていた襟元を緩めたのちにリビングへ向かう。そのテーブルには、今や日常的に置かれていた作りおきの夕食がラッピングされていた。ここ最近夜中に帰る

ことが日常的になつてゐるため、夕ご飯を支度してくれる従者が置いてくれているのだ。

冷たくなつたそれにありついたあと、疲れの気だるさを共にしながらシャワーに向かう。手早く済ませてからシャツに袖そでを通し、暗い廊下を進みながら自室へと向かう。さつさと寝たい。

明日もまだまだ仕事があるのだ。しっかり休んで備えなければ。そんな事を思いながら団長は自室のドアを開けて、一直線にお目当てのベッドへ近づいて倒れ込もうとする。

その時だった。

「おかえりなさい。団長」

子鈴を鳴らしたような細かい声がすぐ後ろで聞こえたかと思えば、しなやかでほっそりとした白い両腕がすでに自分を優しく包み込んでいた。

「トリカブト?」

とつさにその声が、自分の愛する女の子のものであることに気付いて、振り向きながら名前を呼ぶ。その姿を見て団長は目を見張り、同時にふと感じていた自分を包む感触の違和感の正体を悟った。

自分を抱きしめるトリカブトの体は、ほとんど何も身に着けていない、裸そのものだった。

「お、お前っ」

「今日もお仕事、お疲れ様。……最近の団長、いつも遅いの」

「それは……」

話しながら利きいてきた夜目よめでトリカブトの姿を見つめる。かろうじて身につけているのは、いつも髪かみに留とめている花弁を模した紫の髪飾りと金のヘアピン、前のウインターローズの作戦中にプレゼントした白いチェックマフラー、そして漆黒のオーバーニーとガーターベルト。それだけだ。

視線を下に移すと、そこには脱ぎ捨てたばかりらしいゴシックロリータドレスが無造作に散らばっていた。彼女のトレードマークであると同時に、先の害虫との戦争でいつもトリカブトが大事に身に付けていた戦装束いくさしょうそくである。

「ほら、風邪ひくぞ。どうしたんだよ、急に」

トリカブトを軽く抱き寄せたあとで、その背中を優しく叩く。今のトリカブトには、害虫と戦っている時に見せてくれる力強さや勇敢さは全く感じられない。まるで、獲物に睨まれて身をすくませてしまった子犬のようだ。脳裏に、初めて出会ったときの彼女の様子が思い起こされる。まだ戦士ではなかった、彼女のひ弱な姿を。

「ここのところ団長、ずっとお仕事ばかりなの。害虫と戦っていたときより働いているし、わたしのそばにだっついていてくれない……。どうして？ 戦いは終わったのに……」

今にも泣き出しそうな調子だった。自分を見つめてくれる真紅の瞳はうるんで、腰に回された彼女の細腕はふるふると震えている。それを目の前にしてごまかすように言葉をしばらくだす。



「戦いが終わったから、だよ。害虫と戦うことだけが俺たちの仕事じゃない。平和に向かって努力することが、俺たちの役目なんだ。……確かに戦争は終わったけど、あの戦争でトリカブトみたいに家族を失ったり、帰る場所を失くした子供がたくさんいるのは知ってるだろ」

「うん」

長きにわたる戦いの中で団長とトリカブトはスプリングガーデン各地を転戦してきた。そのさなかで救い出せた者、救えなかった者をたくさん見てきた。そして命を助けられても、帰るべき場所を失った人々もたくさん見てきた。

戦いが終わったからと言って、すぐに戦う前の世界に戻れるわけではない。力を持つ誰かが手を差し伸べなければ、無力な民が命からがら生き残ったところで、苦しむだけなのだ。

「俺だって忙しいのはイヤだけど、みんなを放っておいて自分だけ平和な時間を送ることはできないよ。トリカブトなら、わかるよな」

「うん……けど」

「けど？」

「そのために団長が頑張るすぎて疲れちゃうのは、もうイヤなの……。そんなこと、ホントは全部、本来やるべき王族や貴族たちに任せておけばいいのに、なんで？　なんで『わたしたち』が頑張らないといけないの」

「それは——」